ブリューゲルの「子供の遊戯」2

―お手玉遊びから仮面ごっこまで―

森　洋子

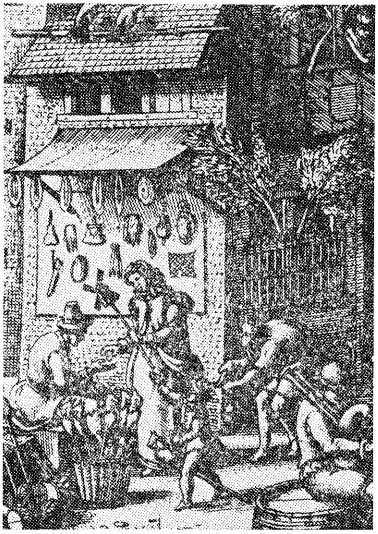
「今の時代の人びとは何に比べようか。彼らは何に似ているか。
それは子供たちが広場にすわって　互いに呼びかけ、
〝わたしたちが笛を吹いているのに、
あなたたちは踊ってくれなかった。
弔い歌を歌ったのに、
泣いてくれなかった〟
というのに似ている。」
（新約聖書　ルカ伝　七章　三一～三二節）

先回（5月号）は十六世紀ネーデルラント最大の巨匠ピーテル・ブリューゲルの活躍した国際商業都市アントウェルペン、ブリューゲルの略伝、さらに彼の「子供の遊戯」（図2a、図2b）の制作の背景などについて触れた。

今回から個々の遊戯について考察してみたいと思う。

画面には二、三歳位から十二、三歳位の、約二百人に近い男女の子供たちが遊びに没頭している。大抵は二、三名で、共通の遊びを楽しんでいる。が、中には十人以上の集団遊びもみられる。だが、比較的幼い子の方がぐるぐる回りや樽の反響遊びなど独り

遊びを楽しんでいる。女の子はお手玉、人形遊び、洗礼ごっこなど静的な遊び、男の子は竹馬、髪の毛むしり、足蹴りなど動的で危険さえもともなう遊びに夢中になる。玩具はほとんど手作りか生活の中にあるもので、後述のように羊や牛の距骨から出来たお手玉とか、レンガを削りながらの計り屋さんごっこ、豚の膀胱の風船、鍋だたき（日本のすいか割りに似ている）など、ごく単純なものばかりである。しかし十六世紀中期といっても、棒馬とか仮面、笛、太鼓など、縁日の屋台で売られる玩具ももちろんある。ピーテル・ヴァン・デル・ボルフトの「村の縁日」（図1）では、居酒屋での軒下で、露店商人から風車小屋つきの風車を母親に買ってもらう子供の情景がみられる。商人の側には子供たちの人気の棒馬が、沢山、籠にさし込まれている。

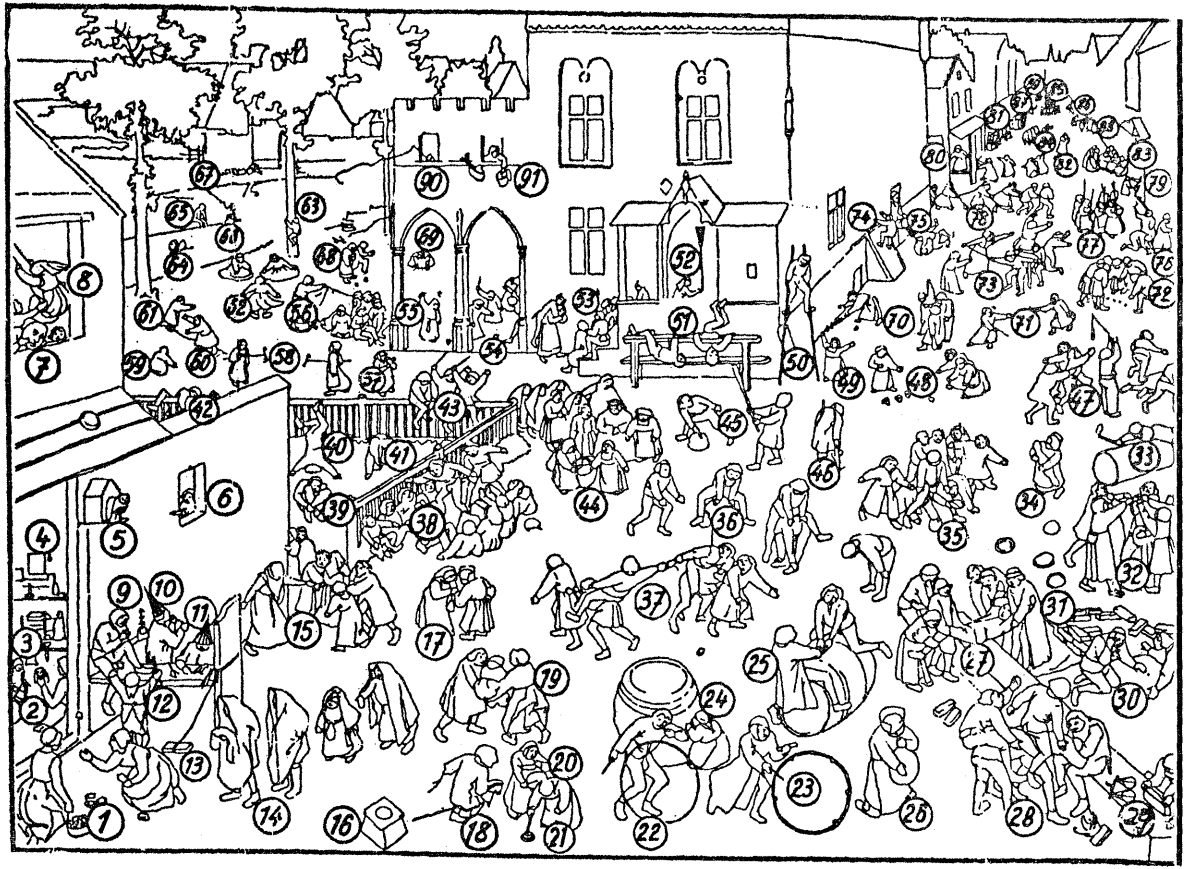


▲図1　ピーテル・ヴァン・デル・ボルフト「村の縁日」
16世紀後半　銅版画

作品解釈の諸説

ではつぎに、画面にみられる個々の遊びについて、ベルギーの民俗学者ヴィクトール・ド・マイヤー博士の分類番号[注1]（図2a）にもとづき、解説を進めていきたいと思う。しかし、ブリューゲルの全作品の中でこの「子供の遊戯」ほど全く異なった種々の解釈がなされる作品も稀れである。そこで初めにごく簡単に、その諸説を紹介しよう。読者はブリューゲルの「子供の遊戯」の具体的な内容、また同時代や十七世紀の寓意的な解釈について知識を得る前に、絵全体の意味についてのあまり詳細な議論に煩わされることを好まないだろう。ゆえに、それらを詳論するのは、個々の遊びについての説明が全部終った後で、児童学の専門諸氏であられる読者のご意見などを参考に、もう一度検討してみたいと思う。

第一、子供の遊戯の百科事典図説



◀図2a ブリューゲル「子供の遊戯」（図2bのトレース。ド・マイヤー『子供の遊戯』一九四一年より）

二十世紀初頭における最初のブリューゲル研究の権威H・ド・ロー[注2]をはじめ、F・ミッシェルやM・フリートレンダーらは、この絵が十六世紀フランドルの子供の遊戯を百科事典的に列挙していると見なし、寓意画的な意味を解さなかった。つまり彼らはこの絵がラブレーの『ガルガンチュア物語』第二十二章に数上げられた二百種の遊びと平行例をなすもの、と解する立場をとっている。

第二、「幼年期」の寓意画説

E・ティーツェ―コンラートは十六世紀後半、人間の一生を四つの時期、すなわち「幼年期」「青年期」「中年期」「老年期」に分類して画く寓意版画の流行に注目した。アントウェルペンで活躍したコラールト、サドラー、ハレなどの版画にこのシリーズがみられ、とくに「幼年期」にはきまって数多くの子供の遊戯が画面に登場してくる、と主張している。[注3]

第三、大人の愚行の縮図説

今世紀後半の多くのブリューゲル研究者は、「子供の遊戯」には一年前に制作された「ネーデルラントの諺」と同じく、大人の罪深き行為、愚行、倒錯した世界が反映されている、と解釈している。例えば、C・G・ストリッドベックは、「ネーデルラントの諺」の中央に「青いマントを夫に着せる妻」（青は偽瞞の色、つまり夫に対し不貞を働く妻）が位置しているが、「子供の遊戯」でもそれと全く同じ位置に「輪回し」が画かれていることに注目した。つまりストリッドベックは無目的に転がる輪を無意味な行為と不必要な労苦の象徴と解したのである。[注4]彼のこのようなペシミスティックな世界観は、十七世紀の『寓意画集』に依拠していた。

十七世紀オランダの詩人ヤコブ・カッツの「子供の遊戯」の詩の導入部に、「世界とそのすべての営為は、個々の子供の遊戯にすぎない」[注5]という銘題がある。ゆえにストリッドベックはブリューゲルの絵に虚言、欺瞞、虚無の世界をみたのである。

しかし、「子供の遊戯」の詩を書いたカッツは、そのような世界像を考えていたのであろうか。以下、筆者はブリューゲルの個々の遊戯の中に、カッツおよび他の十七世紀の詩人の作品をも紹介した。確かに彼らは子供の遊戯に道徳的な意味を与えようとしている。しかしその場合も、詩人たちは子供の遊戯即大人の愚行の縮図というのではなく、例えば、二番の「人形ごっこ」のように、大人に対して子供から遊びの本質的精神を学ぶことを教えているのである。

第四、大人の世界の鑑説

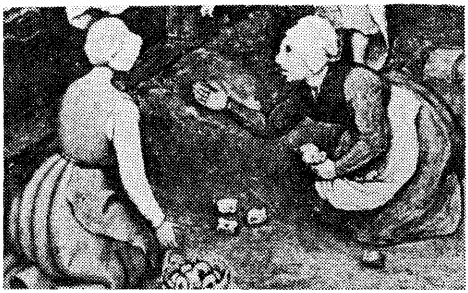
第四の解釈は第三のそれと関連しているが、基本的に相違している点は、子供の遊戯に「倒錯した世界」をみようとはしない点である。F・グロースマンは、「子供たちはむしろ大人のようにみえる。子供たちはあたかも大人たちがその関心事――何ら格別に重要でない――に没頭しているように、真剣にその遊戯に夢中になっている」[注6]と述べている。

ベルギーの研究者R・H・マレイニッセンはどう解しているであろうか。彼の『ブリューゲル』は、過去におけるもっとも信頼できる研究書と評価されている。「あらゆる人間の行為は単に子供の遊戯にすぎない。こういうことはブリューゲルの同時代の観察者にとって明白だった」[注7]。マレイニッセンは同時代人として、ヘントの年代記者マルクス・ヴァン・ヴァルネヴェークを引用する。ヴァルネヴェークは「子供は猿のようである。彼らはすべて模倣したがる」と述べている。つまり、子供の遊戯は、大人の世界の鑑であり、子供の行為をみて、大人は自分の行いを正さねばならない、といった道徳的解釈はあるいは当を得ているかもしれない。ネーデルラントに、「子供と酔っぱらいは真理を語る」という諺がある。そしてまた、カッツの詩に添えられたアドリアーン・ド・ヴェンネの銅版画の上部には、オランダ語で「子供の遊戯」、ラテン語で「遊びから真面目なことを」という吹き流しが画かれていた。

「子供の遊戯」より

1、お手玉遊び Bikkelen（図3）

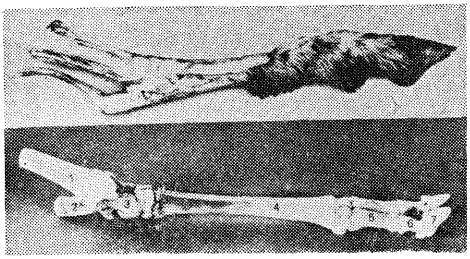
画面ではかなり年長の二人の女の子が地面にしゃがんで、Bikkelen とよばれる羊の後趾の骨でできたお手玉で遊んでいる。ひとりは籠に、他は前掛に自分のお手玉を入れている。このお手玉は解剖学的にみると、羊（牛でもよい）の足根骨として分類される七つの骨のひとつ距骨である[注8]（図4、5）。骨は



▲図3　ブリューゲル「お手玉遊び」（「子供の遊戯の部分」①）

脂肪分を抜くためソーダーで煮たり、ときには玉ねぎの皮で着色することもあった。この距骨は厳密には六面体であるが、子供たちによってそのうちの四面体に名前がつけられ、窪んだ面を「井戸（ブート）」、丸く突起した面を「背中（ルーセ）」、二つの狭い面は「小台脚（スターンチェ）」と呼ばれていた。

ブリューゲルの時代は一回に五個のお手玉で遊ぶのが習慣だったが、この絵でも女の子が五個のお手玉のうち、ちょうど一個を空中に高く投げ、その間に五通りの技を示している最中である。



▲図4　羊の後趾　3がお手玉として使用される距骨

▲図5　羊の後趾の距骨

お手玉は通常、二人ないしそれ以上の人数で遊ぶ。

この遊びは、子供の遊戯の中でももっとも古いもののひとつで、ギリシャ時代はエレガントな手技をみせる遊戯であった。アポロニウスによれば、ガニュメデス（ユピテルに誘拐された羊飼いの美少年）とエロス（アフロディーテの子供）がお手玉で遊んだといわれる。それが次第に、技巧的な遊戯になっていった。この遊びは英語で Fivestones, Hucklebones, 独語で Fangstein, Knöchelspiel などとも呼ばれるから、主に石（大きな石を砕ったもの）を使用した場合もあるらしい。これらは銅、象牙、または銀や金で代用できることもあった。ほかにもっと簡単に、豆、糸で通したリンゴの皮、ナッツ、栃、果実の実などで遊ぶこともできた。

なお、中世ドイツ語の無名作家の詩の中に、

「主よ、私は宝箱に三個の重い指輪と十個のお手玉をしまいました」[注9]

の一句がある。ただし、ここでは bikkel steine という言葉が使われているので、大きな石を砕ったおはじきを指すことも考えられる。

ヤコブ・カッツは、このお手玉遊びについて（ただし牛の距骨）、つぎのような教訓を述べている。

「牛は生きている間、その距骨は誰をも喜ばせない。
牛がその生を終えたときから、距骨は街上での玩具となる。
けちな人間はその財産をためているため、それは誰の利益にもならない。
自分の腹に埋めてしまっているかのようである。
だが彼の死後は事情が変わる。
この貯金者は土の中に深く埋めたがゆえに、
（その遺産を相続したものによって）派手に浪費されるのだ。」[注10]

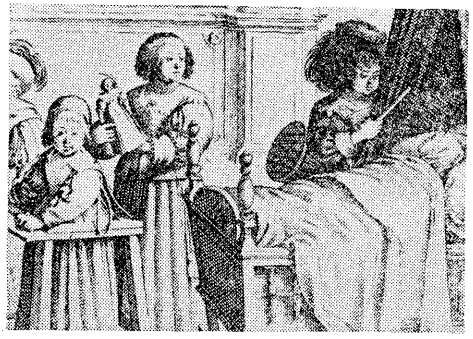
2、人形ごっこ De Speelpop（図6）

お手玉遊びをする子供たちの左側の家では、二人の女の子が人形遊びをしている。一人は人形に洋服を着せ、他はぼろ布で人形を作っているところ。その人形たちは頭巾から衣服までこの女の子と全く同一のスタイルである。アリエズ[注11]も指摘するように当時にはまだ子供服というものがなく（十七世紀になって上流階級の子供が徐々に子供服を着始める）、サイズが小さいだけの大人の衣服と全く同じであった。そして形もそれほど変化がないため、ブリューゲルは絵画的効果を出すため、前掛やスカートの色の組合わせに工夫したようである。

▲図6　ブリューゲル「人形ごっこ」
（「子供の遊戯」の部分 ②）

二つの人形とも少女を表わしているが、一般に人形の90％が女の子、10％が男の子を形どったものであるという。人形遊びはどんな時代であっても女の子のもっとも自然でかつ好きなものだった。レムケによると、すでに先史時代の墓の中に人形が発見されたという。[注12]

ギリシャの女流詩人サッポーも愛の女神への讃歌の中で、人形



▲図7　「人形ごっこ」（アブラハム・ボッセ「人生の四つの時期」の部分）銅版画 17世紀後半

について謳っている。

「アフロディーテよ。私の人形の紫色のヴェールをどうか笑わないで下さい。私、サッポーは貴女にこの貴い供物を捧げます。」[注13]

十六世紀のフランドルの辞書編纂者キリヤーンは人形という古いオランダ語 docke（中高ドイツ語では tocke）を poppe として説明している。[注14] なおポッペ poppe はラテン語の puppa に由来する。十七世紀の銅版画（図7）に、女の子たちが人形を抱いたり、ベッドに寝かせたりして、母親の真似事をしている情景があり、いつの時代にも、人形ごっこは女の子にとってもっとも人気のある遊びであった。

カッツは女の子の人形遊びと男の子の太鼓遊び（つまり戦争の開始ごっこ）を対比してこう謳っている。

「女の子は人形道具で遊ぶ。男の子はもっと強い勇気を示す。女の子は揺籠を揺らし、男の子は太鼓を打つ。」[注15]

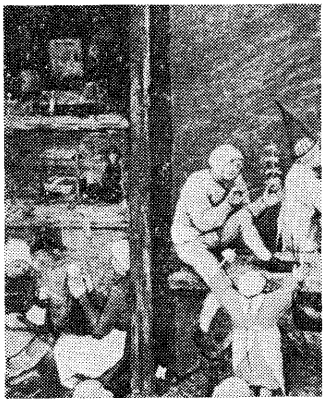
同じくカッツは別の詩の中でもこう謳う。

「人形たちの家具は女の子のやさしい心を喜ばせる。
たとえ最高によいものでも、鉛か陶器にすぎないが、
女の子たちは大きな価値あるものとして尊んでいる。
鳩をやまうずらのように味わいなさい。
安麦のパップ（一種のお粥のパイ）を米パップのように食べなさい。
去勢雄鶏の代わりにあひるに手をのばしなさい。
多くの財産を持っても何ができるのであろうか。
たとえ僅かであっても、持っているもので満足すれば
楽しい人生を営むことができる。」[注16]

つまり女の子が小さな人形道具で満足しているように、人が過分なものを望まなければ（もちろん、やまうずらや米の粥、去勢雄鶏の方が美味であろうが）、人は幸せになれるという教訓なのである。

3、人形の家 Het Poppenhuisje（図8）

人形遊びをする女の子たちの背後にいくつかの段があり、その



▲図8　ブリューゲル「人形の家」と「祭壇ごっこ」（「子供の遊戯」の部分 ③, ④）

ひとつが人形たちの生活空間である。天蓋つきベッドの脇には、黒い服の人形が立ち、新しい洋服を待っているかのようである。こうした人形の家はおそらくブリューゲルの生存した十六世紀にポピュラーになったのであろうか。ストックホルムのノルウェー美術館やニュールンベルクのゲルマン国立博物館に十六世紀の人形の家が保存されている。

4、祭壇「ﾌﾟﾚｰﾄ」Het Altarspel（図8）

家の中ではすでに子供たちの手で祭壇の真似事が作られ、ミサの準備ができている。段の上には色つき木版画の聖画(?)、聖体顕示台、ローソクなどが置かれている。しかしおそらく子供たちは、その段に即興的に彼らの大切な〝宝物〟を飾ったにちがいない。

興味深いことは、ハルトマンによると今日でもオランダの子供たちは、このミサごっこが好きで、子供なりに理解したラテン語で誦えたという。まず神父役の子供が、「Dominus van biscop 司教の主なる神」（正しくは Dominus vobiscum 主は汝らとともにいますように）を誦えると、ミサの侍者（ミサ答え）は「cum spirelutuo」（正しくは、et cum spiritu tuo 汝の霊とともにいますように）と答えるのである。[注17]

5、梟の巣箱 Uilenkot（図9）

壁に黒っぽい巣箱が掛っている。一羽の梟がその入口の止り木にいる。画面が暗いため、足に鎖が結んであるかどうかは分からないが、習慣上、およそ二十センチから四十センチ位の長さの鎖があるのであろう。鳥の飼育は古くから知られていて、ドイツの中世詩人ナイトハルト・フォン・ロイエンタールは一二三六年頃の詩で、

「一年中歌をうたう鳥を飼うことはむずかしい。
だから人はときどき巣箱をみて、おいしい餌を与えなさい」[注18]

と謳い、鳥の声を楽しむ方法を記している。それより半世紀余りして、コンラッド・フォン・メーゲンベルクは『自然の書』（一三五〇年）の中で、今度は〝喋る小鳥〟について述べている。

「雛をつかまえて、
巣箱の中で育てると、小鳥は話すことを覚え、一日中、お喋りする。」[注19]

▲図9　ブリューゲル「梟の巣箱」
（「子供の遊戯」の部分 ⑤）

6、De Spuitebuis（図10）

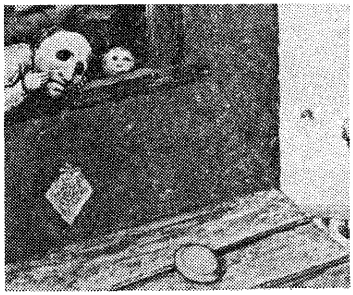
塀ののぞき穴から男の子が水鉄砲をもって梟をねらっている。この絵をみると、今日のフランドルの人びとは、幼い日に遊んだ豆鉄砲 Klakkebuis を想起するらしい（接骨木の髄をとり、その中に噛んで丸めた紙やハンノキの花序をつめ、棒で押し込み飛ばす遊び）。しかしブリューゲルの絵の男の子は水鉄砲 spuitebuis をもっている。この玩具は、通常の豆鉄砲用の筒の先に、四個の穴のあるボタンで塞ぎ、棒で水を吸い込み、それから水しぶきを飛ばす仕掛けになっている。キリヤーンは、Spat（つまり現代オランダ語の Spuit）はオランダ語の buyse（筒）、ラテン語の tubus（管）に由来する、と説明する。

▲図10　ブリューゲル「水鉄砲」（「子供の遊戯」）の部分 ⑥）

7、仮面ごっこ Het Masker（図11）

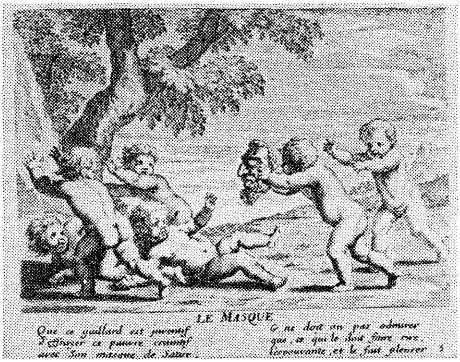
ひとりの少年が大きい無気味な仮面をつけ、二階の窓から外に首を出し、道路にいる仲間を恐がらせようとする。その側で弟らしい小さな子が驚いた表情で空を見上げている。仮面の少年はあまり勢よく体を乗り出したので、赤い丸帽子が屋根の上にころがっていく。こうした仮面はブリューゲルの「謝肉祭と四旬節の喧嘩」などにも見出される。

なおヴァンベーゼラーレはこの仮面ごっこがとくに絵全体の雰囲気と違って、ある悲劇的な響きをもたらす[注20]と述べている。またストリッドベックは「仮面は虚言や偽瞞のもっとも頻度の高い、かつ特徴的な寓意[注21]」と解している。しかし筆者は、ここで子供の好んでつける仮面と、十七世紀の『寓意画集』で論じられる二重人格や虚偽の象徴としての仮面とを同列に論じることにきわめて疑問であると思う。例えばピーテル・ヴァン・デル・ボルフトの「猿の遊戯」（一五八〇年頃、図12）をみても、棒馬にまたがった一匹の比較的大きな猿が、仮面をつけ、鞭をもち、小猿たちを



▲図11　ブリュゲル「仮面ごっこ」（「子供の遊戯」の部分 ⑦）

▲図12　ピーテル・ヴァン・デル・ボルフト「仮面ごっこ」（「猿の遊戯」の部分）銅版画 1580年頃



▲図13　クローディ・ブゾネ・ステラ「仮面ごっこ」（ジャック・ステラ『子供の遊戯と楽しみ』1675 年より）銅版画。

おどかしている情景がある。しかし、ここには人間を模倣して遊ぶ猿たちが列挙的に画かれていて、とくにこの「仮面ごっこ」のみに道徳的な暗喩を指摘するのは不自然と思われる。

十七世紀のフランドル生まれの詩人ジャック・ステラの『子供の遊戯と楽しみ』（一六五七年）では「仮面」（図13）についての六行詩が添えられている。

「この悪童は、サテュロスの仮面をもって、可哀想なおくびょう者の仲間を恐がらせるとは、なんと機智に富んでいることだろう。人を笑わせるべきはずのものが、人を恐がらせ、かつ泣かせるとはなんと感嘆すべきことではないだろうか。」[注22]

このステラの詩にも教訓的な意味は見出されない。しかし詩人の中には大人の迷信を仮面を恐ろしがる子供の心理に譬え、アレゴリーを語っている人びともある。それはデニ・レビィ・ド・バティリの『寓意画集』（一五九六年）で、「幽霊の迷信」と題される詩である。「ごらん、少年が仮面をみて何の根拠もないのに震え、真青な顔して逃げていく様を。空っぽの仮面を見せ、実物を手に握らせるまで、彼は心の落着をとり戻さない。多くの人びとは魔術的な秘儀信仰のため理性を奪われ、狂気のエクスタジーの中に興奮する。もし人が近づいて観察するならば、すぐにそれが芝居であり、そんなに怖がったことを恥かしく思うだろう。」[注23]

注1　Victor de Meyere, *De Kinderspelen van Pieter Bruegel den Oude verklaard*, Antwerpen 1941.

注2　René van Bastelaar et G.H. de Loo, *Peter Bruegel l'Ancien, son œuvre et son temps*, Bruxelles 1905-1907, p. 281, A 3.

注3　E. Tietze-Conrat, "Pieter Bruegels Kinderspiele", *Oudheidkundig Jaarboek*, IV. Ser., II. Jaarg. 1933, p. 127–129.

注4　C.G. Stridbeck, *Bruegelstudien. Untersuchungen zu den ikonologischen Problemen bei Pieter Bruegel d.Ä.*…Stockholm 1956, p. 184–191.

注5　Jacob Cats, *Alle de Wercken*, Bd. I. p. 237 ff.

注6　F. Grossmann, *Bruegel: The Paintings*, London 1973, p. 191.

注7　R.H. Marijnissen, *Bruegel*, Stuttgart 1969, p. 34, p. 106–107.

注8　明治大学農学部助教授反田仁博士のご説明によると、足根骨には距骨、踵骨、中心足根骨、第一、第二、第三、第四足根骨の七つの骨があるが、距骨以外、互いに癒着している。ゆえに距骨はそれ単独としてお手玉に一番適しているし、ほかに偶蹄類なら牛、山羊でもよいとのことである。実際、筆者が試しに豚の距骨を手の平の中に入れると、日本のお手玉に近い、使いよい大きさで、しかも重さも適当であり、指は六面体のどの面にふれても感触がよいのに驚いた。

図4、5の掲載写真は、Jan Pluis, *Kinderspelen op tegels*, Assen 1979, p. 100–101 を使用。

注9　J. Müller, *Zeitschrift des Vereins für Volkskunde*, Bd. XXVIII, 1918, p. 27.

注10　J. Cats, *Zedenkundig vermaan voor jong en oud* (reprint), Culemborg 1977, p. 50.

注11　フィリップ・アリエス『〈子供〉の誕生』杉山光信、杉山恵美子訳（みすず書房、昭和五十五年）、五十～五十一頁。

注12　E. Lemke, *Zeitschrift des Vereins für Volkskunde*, Bd. V, 1895, p. 186.

注13　Sapho の詩については Victor de Meyere, *op. cit.*, p. 1.

注14　C. Kiliaan, *Etymologicum Teutonicae Linguae*, Antwerpen 1599 p. 89.

注15　Cats, *Houwelyck*, Middelburg 1625, "Kinder-Spel".

注16　Cats, *Zedenkundig*…, p. 50.

注17　G. Hartmann en E. Lens, *Hééé Jôh!*, Amsterdam 1976, p. 32.

注18　Neidhart v. Reuenthal (ca. 1236), ed. M. Haupt, 1858, p. 84, 32 ff.

注19　Konrad v. Megenberg, *Buch der Natur* (1350), ed. Franz Pfeiffer, p. 199, 14–16.

注20　W. Vanbeselaere, *Peter Bruegel en het nederlandsche manierisme*, Tielt 1944, p. 51.

注21　Stridbeck, *op. cit.*, p. 188–189.

注22　Jacques Stella, *Les jeux et plaisirs de l'enfance*, Paris 1657 (reprint: *Games and Pastimes of Childhood*, New York 1969), No. 5.

注23　Denis Lebey de Batilly, *Dionysii Lebei-Batillii Regii Mediomatricum Praesidis Emblemata* (1596), A. Henkel and A. Schöne, *Emblemata*, Stuttgart 1967, p. 1319.

（東京工芸大学）